

慈濟

ものがたり

ツーチー 2020年2月 278





— 證嚴法師・新年の三願 —

● 表見返し 文・證嚴法師 訳・済運

感謝の心で過ぎた一年を送り出し、
敬虔な心で新しい一年を迎えるこの時、

自分のために発心立願して、世の中のために心から祈ります――

四大元素の調和が取れ、平穏で災害のない世界になりますことを。

全ての家庭が幸福で、社会に争いがなく、平和になりますことを。

人心が浄化され、慈悲利他の心により智慧と幸福がもたらされますことを。



精舎の尼僧は正殿の扉を開き、国内外からのボランティアの「帰宅」を迎える。言葉、宗教、肌の色の違いを超えた慈済の慈善志業は縁と志を持った人々が共に喜んで歩む、「善」を求める道である。彼らは毎年、「帰宅」して深く学びたいと、心の故郷へ帰る日を待ちわびる。
(撮影・蕭耀華)



慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】

慈済の心言葉

慈願／訳 4

【心の交流】

いつの世でもしつかり追随する
自分の名前で呼ばれるようになりたい

慈願／訳 8
善耕／訳 10

【主題報道】

善の道 行かずにはいられない道	慈願／訳	12
善の源、心の故郷へ帰って	高嶋由紀子／訳	20
最も危険な場所で最も貧しい人のために	高嶋由紀子／訳	34
愛と平和を教える校長	善耕／訳	44
地震の後に善が循環する その変化は自分から	惟明／訳	52

【お板さんが法の香に浸る】

金剛の体は壊れない

明陞／訳 62

【證嚴法師のお諭し】

この世の衆生と愛を分かち合う

慈願／訳 64

【人物誌】

心身一体となって法華を書く 書道家・周良敦 惟明／訳 70

【二つ屋根の下】

己を小さくすれば愛される

葉美娥／訳 82

【健康の玉手箱】

寂しいお年寄りの年明け

常樸／訳 96

【行脚の軌跡】

喜びの日々

済運／訳 100

慈済大記事【一月】

済運／訳 106

慈済の心言葉

歳末は慈済^{ツチ}大家族のメンバーが増える目出度い時節である。世界各地から養成講座を受けた人たちが「心の故郷」である静思精舎に帰り、證嚴法師から委員（女性）や慈誠（男性委員）の認証を授かるのである。とは言うものの、この旅に出るのが容易でない人は少なくない。

例えば、アフリカや東南アジア諸国のボランティアは、数年間貯金してやっと台湾への旅費を捻出しているのである。試練はそれだけにとどまらず、或る人は習気^{じけ}を克服してやっと、人生の転機が訪れるのである。

今年認証を受けた中に、幼い時にいじめを受けていたため、帰宅すると両親

親に暴力を振るって鬱憤を晴らしていたという若者がいた。挙げ句の果てにヤクザ連中とつき合って暴力を振るった。後に慈済人の誘いで環境保全に身を投じてから、落ち着いて回収作業をするようになった。そして、過去のしたい放題を反省して懺悔し、その時から悪から善へ向かう原動力が出てきた。

本期の主題報道にあるが、二〇一一年にシリアで内戦が勃発し、クーマ教授は親族と散り散りになった心の痛みを経験したことからトルコの慈済人と協力してマンナハイ学校を設立し、難民学童の教育のために奔走した。誹謗中傷を甘んじて受けながらも彼は『愛』と言う名の家」は世の数億人を受け入れることができ、ここから羽ばたく子供たちが未来のモスリンの星や月として輝くことを信じている。

今回、渡台した時、クーマ教授一行は難民だという理由で一時は飛行機

への搭乗も危ぶまれた。しかし彼は終始堅く信じていた、他人を助けられる人になるのは主によって与えられた職責であって、今この時を自分は国王や富豪よりも豊かなのだと。彼は人生の終点で「与えられたこの機会に感謝し、私はそれをやり遂げました。ただ時間が足りないことだけが残念なのです」とアラーに伝えられると思っている。

近年来、ますます多くの海外の現地ボランティアが、台湾へ認証を受けに帰ってきている。彼らの多くは、慈済の国際支援を受けた者たちで、慈済に深い感銘を受け、ボランティアの養成講座を受けているため、現地で慈善ケアの主力になっている。彼らの多くは仏教徒ではなく、慈済に参加したために信仰を改めたわけでもない。「大愛」という基礎があるからこそ華人ボランティアと共に行動できており、それは宗教間の合作において共

通認識の精神根源があるからだ。

上人は「全ての宗教は共に一つの方向に向かっています。目指すのは愛なのです。この世では愛だけが生命の共同体です」と再三に亘って強調している。上人はかつてこのように海外ボランティアの幹部研修会で、会場では数カ国語に翻訳する必要があるが、皆には共通の「慈済の心言葉」があり、それが「純潔無私の愛」であると述べたことがある。

慈済の済世は国内から海外へと広がり、種族や宗教の別なく、深く心を尽して寄り添うことを表した信仰の帰趨と言える。これは仏陀の弱者を労るという本懐を実践しているだけでなく、現代という動乱の時代の中で平和と助け合いを渴望する人心に間髪を入れず応えているのである。

（慈済月刊六三七期より）

いつの世でもしっかり追随する

◎文・マレーシア読者 何威明 訳・慈願



二〇一八年十一月の「慈濟海外支部委員及び慈誠の精神研修会」の時のことを回想しますと、その時私は板橋靜思堂の中に座って、證嚴法師が私たちに委員の認証を下さるのを、待っていました。心の中では期待と不安が交錯して緊張してきたので、認証を下さる時の法師に伝える言葉を反復練習しました。音楽と共にゆっくりと入られた法師のお姿が見えた時、感動で涙を抑えることができなかったことが最近のように思い出されます。

一年間の養成期間に大した障害も起こらなかったのは、夫が家庭を守ってくれるので安心して講座に専念できたことと、父母も健康で私の仕事も順調だったおかげでした。そのような周囲の人達の支え無しでは成就できませんでしたから、誠に感謝に堪えません。同じ組の人からも「あなたは本当に幸せですね、初めての台湾訪問が認証を受ける旅になって」と言ってもらいました。

五日間の研修の内容はどれも豊富で、中でも私が感動したのは台湾の同門

たちが私たちを家族のように世話をしてくれたことです。彼らの和合と互助と協力の精神は見習わねばならないと思いました。

證嚴法師と慈済人の間にある深い情にも感動しました。台湾の邱秀珀が病を忍んで慈済のために発願したというお話、黄思賢が法師の足になる発願をして、災難の有るところならどんな厳しい場所でも足を運んで支援し、永遠に疲れたとは言わないと話したこと、また、米国の陳宝如は曲を作って法師に想いを馳せ、人々に「法の香りに浸る」開示に参加するようによびかけていました。台湾の有名な女優の唐美雲は、仏法を戯曲化して舞台で熱演し、仏法を広めていました。

どの方もお話の中で、法師は生命を賭して弟子の慧命のためそして仏法のために身を捧げていて、疲れたとは一言もおっしゃらないと言っています。弟子として精進に励み、法師の望まれる事を私たちは担わねばなりません。

ボランティアたちの体験を聞くと、法師はどんなに苦勞があっても、海外の弟子認証授与には必ず自ら出られるそうです。私たちにどんな徳があつ

て、法師に苦勞をかけてもいいのでしょうか？それでも法師は私たちを可愛がつてくださり、一生一度の認証と帰依には、必ずご自身の手で慈済委員の名札を付けて下さるのです。

法師は人生の自然法則をよくご存知ですから、弟子である私たちもよく知らねばなりません。慈悦師姊のお話に、いつの日にか、もしものことがおきた時でも私たちはやはり戒を以て師とし、法を以て師として精進修行すれば、法師が再び帰られた時、私たちを探すことができますとありました。一心に精出し、多くの法をよく聴いていれば私たちはしっかりと法師に随っていくことができるのです。（慈済月刊六三二期より）

自分の名前と呼ばれるようになりたい

◎文・澎湖刑務所の受刑者読者・阿国 訳・善耕

慈済の師兄と師姊たちは読書会を開いている。最初に出会った時、お互い初



めて会ったため、信用できなかったことから親しくすることができなかった。要するに、私たちの中には、恐ろしい罪を犯した人が何人かいたからである。

證嚴法師が私たちのような取るに足らない犯罪者を気にかけているとは思ってもよらなかった。だが法師は私たちを正しい道に導くために、風雨を物ともしない慈済人を遣わしてくださったのだ。

私たちに対する師兄^{ペーション}、師姊^{スーヅエ}の尽きない思いやりは私たちの警戒心を解き、ひいては人生を如何に楽しみ味わうかを教えてくれた。例えば、茶道の授業で私たちに茶を味わうことと人生の道理を教えてくれた。私は退屈な刑務所の生活の中で「善に解釈する」意味を悟り、「善人」になることは難しくないことを納得した。

受刑者は刑務所に入る時に番号を付けられる。それは「囚人番号」と呼ばれ、そこでの私たちの名前となる。将来、二度と「囚人番号」で識別されることなく、自分の名前を呼んでもらえるようになりたいと切に願っている。（慈済月刊六三〇期より）

— 主題報道 —

善の道

娑婆の世で仏法を学び、心の故郷に帰ってリフレッシュする。
この人生で扉を開ける為に、善に向かって精進する。

撮影・蕭耀華 静思精舍正殿

行かずにはいられない道

千

年以上前、古代インドの町ナーランダは、世界各地の仏教徒が遙々困難を超えてでも経を得ようと目指した聖地であり、最盛期には万人以上の僧や学者が修行と学びに訪れていた。それ以外にも中世期におけるカソリック信者が歩いた道の原点で、国連ユネスコ世界遺産に選ばれたスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路は、今では国境

や信仰を越えて、世界の旅客が参拝に赴く一筋の聖なる道となっている。

どの人も生涯の中で、心を馳せる旅や道があるだろう。先覚者の足跡を追いつめたり、または名山への参拝やかつての歴史の舞台で時空と対話してみたり、或いは心霊導師を尋ねて心の迷いを解くなど色々ある。それに似た経を求める情景が、この数十年来台湾の「後山」と言わ

れる花蓮においても見られる。

台湾在住者だけでなく、海外からも多くの人が続々と航空機から列車に乗り継いで、静かな片田舎にある花蓮靜思精舎を訪れているのだ。この路で経を求めに来るのは個人だけでなく、各国の慈善団体、企業組織、政府代表、各領域の学者にまで及ぶ。皆が求めようとする経は一樣ではなく、慈善様式と国際支援について、組織管理とボランティア規律について、環境保全回収と再生に関する哲学並びに遺体寄贈と生死の観念について等様々である。この道は単純な宗教的巡礼を超越していると言える。

世界六十カ国あまりの国と地域に分布している慈済ボランティアにとって、花蓮靜思精舎は一生の中で一度は訪れなければならない場所である。彼らは慈善善行の仕方や価値観と理念に賛同しており、自分の人生観と通じる所があると言う。彼らは元来の宗教を敬虔に信仰している、さらに慈済の経を求めて投入すれば、自分ほもっと良い信者になれると考えている。

● 慈済発祥の地に來ることができ、證嚴法師から認證を受けられるのは、慈済人にとって一生の憧れと願いなのである。



毎年の歳末に彼らは次々に台湾へやって来る。或るカソリック信者は遙遠な南米から三回も航空機を乗り継ぎ、三十時間以上かけて来たそう。キリスト教信仰に篤い南アフリカのズール族たちが贅沢な出国の目的地に選んだのは台湾である。またマレーシアや中東からのイスラム教徒も長年の願いが叶ってこの旅路についている。

●海外の慈済人が台湾に入国する時、人の多い桃園空港でも一目で「身内の人」を見付けられるよう桃園地区のボランティアが待っている。その出迎えチームは深夜や寒い冬でも必ず到着時間には現れる。その姿は、まるで空港の灯台守のようである。(撮影・黄筱哲)

中には、人生で初めてパスポートを申請した人、または懸命に貯金をして往復の航空券を工面した人もいる。ある人は杖をついて、また車椅子で、病を罹っている人、身重の人もはるばるやって来た。そしてそれぞれが願を達成していた。数日の団体生活の中で、彼らは「経の取得」、「巡礼」、「参観」をした。人気がない山林に行ったり、静けさと快適さを求めるのではなく、ましてや押んだり神頼みするわけでもなく、大勢の人と大部屋で固い床に布団を敷いて就寝する旅を選び、団体生活の規律を守り、揃いの服を着て寝、夜明け前に起床し、三食は菜食を頂いている。

時間を無駄にせず、彼らは互いに多くを語り合っているだろうか？平常の日々の中で、皆は慈善、医療、教育志業の人文風情を目の当たりにしたり、勇敢に群衆の中に身を投じて複雑な人間関係と現実の苦難に立ち向かっている。また他人の苦難を見て己の福を知り、幸せな人生を大切にして更に幸福を作る人生を歩んでいる。その道を歩いて行く中に心は喜びに満ち、道中の辛さも忘れ、ただ途上の感動と発願だけを明瞭に覚えている。

その途上で、ある人は迷いから解き放たれたいと渴望したり布施に喜びを感じ、また中途でも絶えず参加してくる人もいるが、皆共に嘆き、喜び、学び、分

かち合うことで、経を得る途上において信心と勇気を強めることができる。

途中でどれだけの仲間がいようと、経を得に行く過程では結局求めるのは「自我との対話」或いは「競って善行することだと言える。一体何を感じているのだろうか？それは、水を飲む時、冷たいか否かは本人しかわからないようなものである」としか言えない。



台湾の国土は小さいが、善と包容力に満ちた国民の気質と環境の特質によって、宗教の多様性は世界で二番目に上げられ、僅かにシンガポールに次ぐ。宗

教の面から見れば、仏教徒は世界総人口の七パーセントにしか過ぎないが、台湾で誕生したこの経を求める道によって、より多くの人に台湾の人間仏教が生活に密着している魅力を示している。

以前、台湾人は「外国の月は台湾よりも丸い（隣の芝は青い）」という考え方を持っていたので、欧米や他国に学びの場を求めて留学した人が少なくなかった。しかしこの半世紀を経て、台湾の慈済は海外の多くの人が経を求める目的地となっている。彼らは遙か遠くから慈済の美と魅力を感じ、台湾に来るのは慈済に触れるためであり、慈済の学校に入

学したり、慈済病院で医学技術と人文を学んでいる。

半世紀以来、證嚴法師は一貫して、台湾慈済が世界の模範になることを願ってきた。実はその期待は数十年来実現していると言える。近年、益々多くの学者が、宗教と言語、民族を超えて受け入れる慈済の善の道について学術的な研究を行っている。

「證嚴法師と慈済ボランティアは仏法から解釈した善行の道理を、華人でないボランティアを通して現地の宗教背景に沿って『解釈』し、応用しているのです」。慈済大学宗教人文研究所の盧

蕙馨教授は論文の中で「慈済のボランティア奉仕は、異なる宗教の人が信仰を实践する機会と環境を開発しているのです」と述べている。

心の故郷に帰り魂を洗う旅は、単に寺に参拝して経を得ると言うよりも、分秒分かつた、無形の『善』を求める道」なのではないだろうか？異なる国、異なる宗教という時空の中で皆、着実に各種の善行妙法を实践して正しい方向に向かい、ますます遠くに行ってしまうのではなく、歩いて行く中に最も単純で素晴らしい自分を発見するだろう！

（慈済月刊六三七期より）

善の源、心の故郷へ帰って

いよいよ「原点をたずねる」時。静思精舎へ続く小道を歩くと、両側には田園風景が広がり、俗世の苦悩や世事の試練から隔絶されていくかのようだ。海外の慈済人は今、歓喜で胸を一杯にして故郷へと向かっていた……

南

へとひた走る列車。いくつトンネルを抜けたことでしょうか。ふいに

眼前に青い海が広がりました。左の車窓の外には、降り注ぐ陽光にきらめく太平洋の

海が果てしなく広がり、窓越しにでさえ、頬を撫でる潮風が感じられるような気がして、に

わかへのびのびとした気持ちになりました。

台湾東部に位置し、美しい山々と清冽な水で知られる花蓮は、人間には到底造りだせない雄大な自然景観を数多く有し、人々を魅了しています。慈済人の

●10月下旬、海外養成訓練委員慈誠精進研習キャンプのために心の故郷である静思精舎を訪れたボランティアたちは、常住師匠の引率の下に手を合わせて礼拝した。



歩みは正にこの花蓮から始まり、半世紀の間に世界中に広がっていきました。国が異なり、時には言葉も通じず、信仰にも違いがある中、皆は同じ信念を持ち、謙虚な態度で、真心をもって尽くし、共に善への道を歩み、一人一人が感動的な物語を奏で続けているのです。

毎年、年末が近くなるこの時期、台湾各地のボランティアが「原点をたずねる旅」と称して花蓮に帰郷します。また、海外のボランティアも苦労をいとわず、自費で休暇を取り、「受証及び研習キャンプ」に参加するため世界各地から台湾にやって来ます。

ちなみに、年末に限らず、毎年様々な時期にこのような活動が数多く行われており、世界各地のボランティアに参加の機会を提供しています。その目的は自己精進であり、「帰郷」であり、「仏の教えに学ぶこと」なのです。

惜しみなく与え、虚心坦懷に学ぶ

街路に木の葉が舞い落ち、吹き付ける風に冷たさを感じる晩秋にも関わらず、花蓮の静思堂は熱気にあふれており、人の温もりが外の寒さを一時忘れさせてくれました。

「鍋はあちらにお願いします」

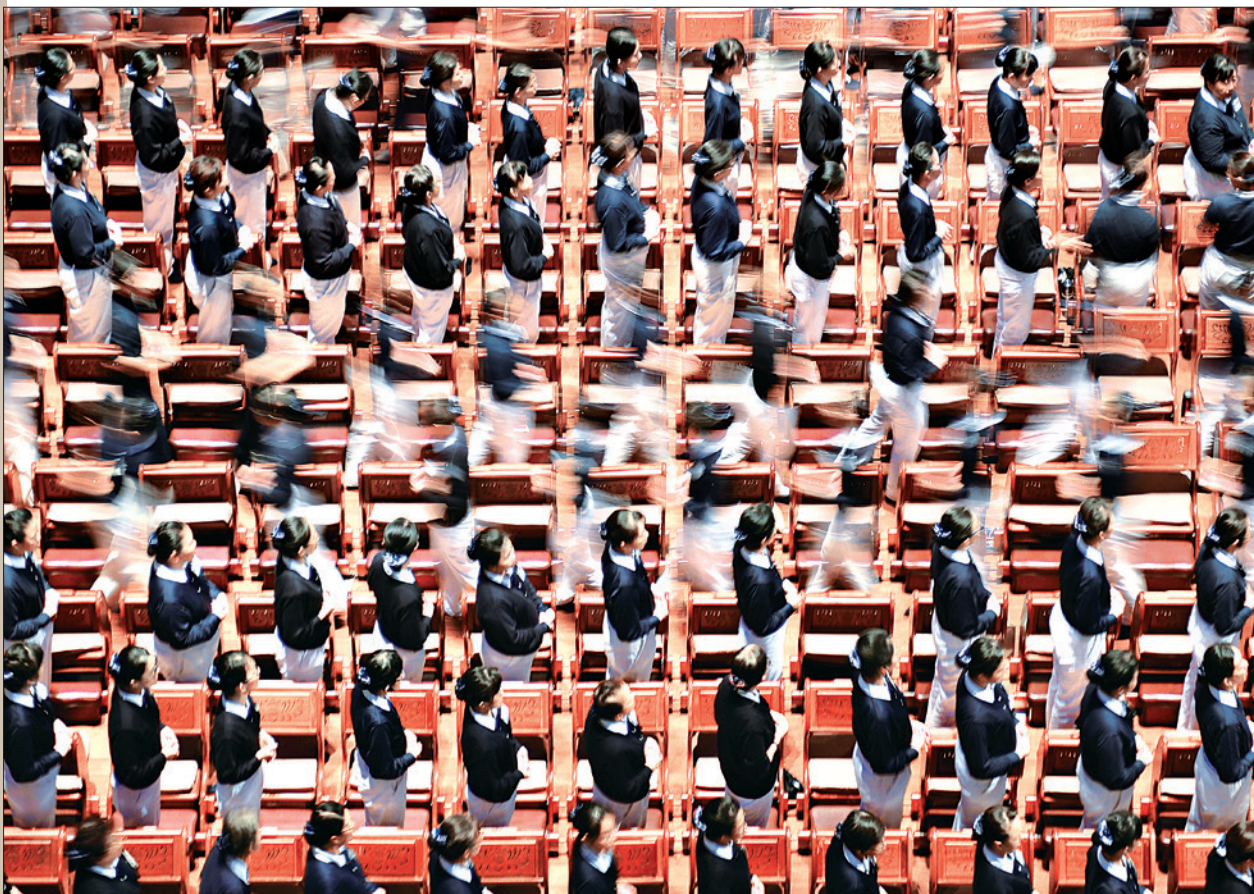
「この野菜を先に切ってください！」

厨房では、朝食の後片付けを終えたばかりのボランティアたちが一息入れた後、またすぐに昼食の準備を始めました。彼らはもう何日も朝から晩まで忙しく働いています。しかし、海外から参加した受講生やスタッフに、家庭の温もりを感じてほしいと、一食たりとも手を抜かず、心を込めてこの上なくおいしい精進料理を作ります。

一階では、無線を手にしたボランティアが伝達を受けた情報を傍らのスタッフと細かく確認したり、機動班は息つく暇

なく忙しくしていました。行き来する大勢のボランティアは何かあれば、例えば車の用意や人の配置といったことです。が、全て機動班に問い合わせるのです。計画は永久に変化に追いつくことがないため、彼らはいつも臨機応変に物事を解決しなければなりません。しかし、彼らはいつも笑顔を浮かべ、厭な顔は一切見せません。

「認証を授かる時のことを片時も忘れないでください」。「それは責任であり、使命でもあります！」「真心をもって、様々な境遇の試練に耐えなければなりません」。演壇の上の講師たちはリアルな



●海外養成訓練委員慈誠精神研習キャンプでは、ボランティアたちも静思堂講經堂で『法華經序』の礼拝の後、繞にようぶつにようほう仏繞法をする。繞ぎやうどう仏とは行道のことで、自己の心身を深く落ち着かせる方法の一つでもある。

人生経験を惜しみなく伝え、演壇の下では千人近い受講者が笑ったり、熱心に耳を傾けたりしていました。

このキャンプでは慈済の善行の道の始まりや発展、慈済人の死生観、戒律や儀軌（儀式や祭祀の規定）、国際活動の最新情報、経験の共有といったテーマについて何日にもわたる集中講座が行われます。今年は九つもの言語の同時通訳の下、皆互いに優れた部分を吸収し、経験から

学び合いました。

慈済日本支部の副執行長である陳麗芬チェンリーフエンさんは養成訓練の幹事も兼ねており、ほぼ毎年日本から参加しています。彼女によると、「百聞は一見に如かず。一万冊の本を読んでも、万里の道を行くのは及ばない」のだそうです。彼女は受講者と共に花蓮に帰ることができる縁を有難く、また嬉しく思っているそうです。

キャンプでは様々な分野の講師に学

び、多様な側面、様々な角度から重要なポイントを得ることが出来ます。陳さんは、研修に参加することで、最新の情報が得られるだけでなく、多くの貴重な収穫が得られると感じています。何よりも、自らその場に臨んでこそ「法そのものを学ぶ」ことができ、それらの智慧を日本に持ち帰り、より多くの人に慈済を理解してもらいたいと考えています。

慈済の道を行く人はみな平等 心地の風光を存分に眺める

今年はヨーロッパ、アメリカ、アフリ

カ、オセアニア、アジアなど三十三の国と地域から千六十四名のボランティアが結集し、十月下旬と十一月月上旬の二回に分けて、花蓮と板橋で各五日間の研習キャンプと受証を行いました。彼らは様々な縁で慈済に関わるようになりましたが、天災や人災で慈済の支援を受けたことをきっかけに慈済に参加した人もいたそうです。また、大愛精神に賛同して、この善への道を進み始めた人も少なくありません。

十年前に認証を授かったマレーシアの実業家陳順福^{チエンシンフー}さんは今回、妻と共に八十一歳の母親、沉宝珠^{ユエンバオジュ}さんを伴って花

蓮に戻ってきました。沉さんは第一回受証式に参加したメンバーのうち、二番目に年長者でした。沉さんは敬虔な仏教徒で、文字は読めないものの経文はとくに覚えてしまい、誦んじることが出来ます。

沉さんは最初、慈済をおかしな団体だと思っていました。「環境保全活動と仏法に何の関係があるのだろうか？」

息子に連れられて「法の香りに浸る」活動に参加してから、彼女は徐々に仏法の意味や慈済の活動を理解し、環境保全の善行に賛同するようになりました。

息子さんによると、母親の沉さんは四年の見習いと四年の訓練を経て、今年つ

いに受証することになったのだそうです。「受証の後、母の使命は子や孫たちみんなを慈済の大家族に加入させることです」と陳さんは言います。

同じくマレーシア人のナダラヤン(Nadarajan)さんは、インド系で敬虔なヒンドゥー教徒でもあります。二〇一五年、慈済で環境保全活動をしている近所の人から「回収した物を売った収入は貧しい人たちを助けるために使うのだ」と聞いたナダラヤンさんは、自分も労力と時間を投じて環境保全と人助けを行うようになったのです。

当時六十歳だったナダラヤンさんは、

面白い講義
 寸暇を惜しんで精進する

キャンプの講座は法脈の精神と慈済の活動をしつかりと結びつけている。ボランティアたちは大事な言葉を一言も逃すまいと、熱心に講義を聴きノートを取っていた（下右）。中国語が分からない海外からの参加者のために、バックヤードでは通訳人員が間断なく同時通訳を行っていた（下中）。受講者は精舎の師匠たちから贈られた慈済の出版物を隅々まで読み、自分の国に持ち帰って精進する準備をしていた（下左）。



夜間のガードマンをしていて、月曜日から日曜日まで毎日十二時間働いていたため、出勤前や帰宅途中にバイクで住宅街や商店街を通る際に回収できるものを探しました。臭いも気にしませんでした。

「私はとにかく環境保全活動は良いことで、人助けになると考えていますから、臭いとか汚いとかは感じませんし、まして他人の視線なんか気になりません」。

ナダラヤンさんは、見習いや訓練の過程で言葉が通じないという問題に直面したものの、ひたすら法を求めて精進しました。この善への道において、困難に直面して更に福を知ったのです。台湾でのキャンプの期間は、ちょうどインド系マ

「認証」とは？

ボランティアとして参加し、理念を熟知した後、発心して慈済の志業に参加するための養成訓練過程から認定されるまでのこと。その期間、まず慈済委員または慈誠隊員になる「見習い」及び「養成訓練」課程を経て、実際に慈善、医療、教育、人文といった志業の奉仕に従事する。世の中の苦しみを見て、志を固め、永遠に責任を担う決意をすることで、正式に認証ボランティアとなる。これより「仏の心を己の心とし、師の志を己の志と」して、人助けの菩薩道を歩む発願をするのである。

レーシア人の伝統的な祭典であるディーパバリと重なっていましたが、彼にとってにはキャンプに参加できる方が祭りよりも嬉しいのだそうです。

宗教や国が違っても
善へ向かう心は同じ

そびえ立つ中央山脈の麓、田園の中にたたずむ荘重な建物があります。建設されてからもう五十年になりますが、変わることなく静謐な雰囲気醸し出しています。

ここが慈済人にとっての「心の故郷」、静思精舎です。精舎の名である「静思」

から慈済の根本思想が生まれ、慈済人が善に向かって発心する源でもあるのです。

花蓮で行われたキャンプも終わりが近づいてきました。内容豊富な講座や経験の共有から、受講者たちは多くの成果を得ました。五日目、待ちに待った認証と歳末祝福会が無事に終わると、彼らの気持ちは再び高ぶってきました。そう、ついに「帰郷」の時が来たのです。

静思堂から静思精舎へ行く道は、たびたびすれ違う大型トラックが埃を舞い上げていましたが、十分余り行くと、車は精舎路に入りました。街路樹が風に揺られ、右手に見える田園風景が気持ちを解

きほぐして世俗の憂いや悩みを消し去ってくれるかのようでした。

ボランティアたちは小グループに分かれ、順序よく静思精舎前で記念撮影をし、その後は常住師匠の案内で精舎内の「朝山」遊歩道やロウソク工場、精巧な設計の大殿などを見学しました。

精舎の師匠たちにはそれぞれ個性があり、精舎巡礼の案内スタイルも様々です。たとえば、徳安師匠は中国語と閩南語を用い、ユーモアを交えて紹介してくれました。中国語が分からない受講者は、イヤホンガイドの同時通訳で内容を理解することができません。

複雑で慌ただしい世間に身を処して闊達にしていますから、心、身、靈的な困難に直面することは免れません。しかし、いつでも誠実な心で善に向かい、初心を忘れさえないければ、差し出した愛と善の心はやがて養分となり、心を潤し、人生を豊かにしてくれるでしょう。（資料参考・顔玉珠）

（慈済月刊六三七期より）

●静思精舎の「朝山」（注）遊歩道にて。常住師匠が海外ボランティアに心の故郷を案内する「巡礼」は、「原点をたずねる旅」を更にすばらしいものになっている。

（注）仏に向かって三步進んで一回五体投地（礼拝）する活動。

大勢のボランティアの中には、頭にスカーフをまもっている人も見られました。彼らは敬虔なムスリム信者なのです。さらにはキリスト教の信者もいました。つまり彼らは元々の信仰を持ったまま、慈済に加入しているのです。高雄からキャンプカウンセラーとして参加しているベテランボランティアの陳済州さんチェンジージョウによると、大愛に区別はなく、慈済に参加する時に最も大切なのは『まごころ』という、誠実に善に向かう心なのです。痩せた土地は、常に耕し日光と水を与え続けなければいい土地にはなりません。縁があつて慈済の善への道を歩む人々は、



最も危険な場所で 最も貧しい人のために

ズッキ神父
(Fr. Zucchi Olbrice)
プロフィール：
ハイチ人、
首都ポルトフランス在住
年齢・66歳
職業・カトリック教会の神父

心の歩み・愛に勝るものではありません。證厳法師も同じ考えたと思います。

法師が「誰でも心に仏性を持っている」と言うのはそのためです。

私にとっては、神が私に内在しています。同じような道理なのです。

文・葉子豪 訳・高嶋由紀子

「ズッキ神父は、先日インタビューで『あなたの願いは何ですか』と尋ねられた際、誰もがきれいな水と食べ物を得られること、と答えたのです」。

ボランティア認証式の演壇で、ハイ

チ (Haiti) のズッキ神父が話を始める前から、司会兼通訳を担当したアメリカの慈済ボランティア陳思晟さんチエン スー ションは目を潤ませていました。

救済活動の経験が豊富なボランティ

アに涙を流させたのは、想像を超えた貧苦でした。世界銀行の統計によると、ハイチの二〇一八年の国民平均年収は八百ドルで、西半球で最も貧しい国です。そしてその首都ポルトランス (Port-au-Prince) で最も貧しく、犯罪率が高いのがシテ・ソレイユ (Cité Soleil) とラ・サリーヌ (La Saline) の二つのスラム街です。子供たちはごみだらけのたまり水をすくって飲んでいます。住民はトタンやビニール、木ぎれで作った掘っ立て小屋に住み、満足な食べ物ありません。

アメリカの慈済ボランティアは貧困中の貧困に苦しむ人々を救おうと、地元

で四十年にわたり活動するズッキ神父を探し出し、協力して白米等の配付や温かい食事の提供などを行うことになりました。そして、今日まで七年にわたり、大勢の人々を支援してきました。ズッキ神父は慈済の取り組みに大変感動し、はるばる米国を訪れて慈済のボランティア養成講座に参加し、今年十一月には證厳法師から認証を受け、正式に慈済ボランティアの一員となりました。

「私が認証式に来たのは上人の教えを信じたからです。この世で天災や人災をなくしたければ、人の心を浄化する以外にないのです」。ズッキ神父は力強い英語で深い感動を語りました。

子どもからお年寄りまで
みんなに食べ物を

なぜカトリック教会の神父が慈済ボランティアを最も信頼するパートナーに選び、なおかつ自身がボランティアの一員にまでなったのでしょうか。話は二〇一〇年一月のハイチ地震にまで遡ります。マグニチュード七・〇の大地震に見舞われ、ポルトープランスの町一面が無惨な姿と化しました。震災後、ズッキ神父は五つの教会学校の再建にとりかかるとともに、シテ・ソレイユとラ・サリーヌの貧しい人々に食糧や物資を届けるために奔走しました。しかし、支援に來た慈

善団体は現地で有効な支援を行うことができませんでした。治安維持に努める国連平和維持軍も、武器こそ持たないものの完全に制御不能となった群衆に対し為すすべがなく、トラックから放り投げられた物資を群衆が奪い合うのをただ見ていることしかできませんでした。

二〇一二年になり、ズッキ神父が慈済ボランティアと共に地域に入ると、無秩序な状態に変化が見られるようになりました。

「以前は、どんな組織をもつてしても最後まで配給をやり遂げることができず、毎回途中で中断してしまっていました。しかし慈済と共に活動するようになって



●台湾支援米の米袋で作った帽子と慈済ボランティアの制服を身に着けたズッキ神父がハイチの貧民区の住民を訪問した。(撮影・Jean Keziah)

からというもの、配付や支援がとてもスムーズに進むようになったのです」。

ズッキ神父は、北米から來た慈済ボランティアが、住民を配付に協力するよう導いたことを褒め称えました。陳さんがこう補足しました、「私たちは地区ごとに台帳を作りました。地区の全員に一斉に配付して一緒に帰るので、帰り道で奪われることもなく、社会で最も弱い立場の子供や高齢者も皆、受け取ることができたのです」。

配付に使用した白米は、慈済が農業委員会農糧署に申請した海外援助用の食用米で、米袋には「Love From Taiwan」と印刷されていました。第一回は白米八千

袋、現在は一回に一万袋以上の食糧を配付するまでになりました。ボランティアの熱意と思いやりを目にしたズッキ神父は、慈済に見習いたいと、二〇一七年十一月に初めて台湾の花蓮慈済本部を視察に訪れました。花蓮を訪れる前、ズッキ神父は当時すでに教会学校の仕事や学校給食の無料提供、慈済の白米配付の仕事を兼務していましたが、「善の門を開くのは難しい」と思っていました。というのも、善の門は一度開けると閉じられなくなるからです。

「もともと、お年寄りを支援することは考えていませんでした。しかし、上人

にお会いして考えが変わりました。上人はすべての人を助けなければならないと強調していたのです」。

ズッキ神父は勇気を奮い起こしました。今までどおり児童に温かい食べ物を提供するほか、さらに二百人余りの障害を持つお年寄りに食事を提供することにしたのです。「子どもからお年寄りまで一家全員」に食事を供給するために、スタッフは深夜〇時から教会学校のキッチンで仕事を始め、七十二個の大鍋で一日二回、温かい食事を作ります。一日で鍋にして百四十四個分、これは延べ人数にして二万人分の量になります。

貧しい人が貧しい人を助ける

この九年の間、陳思晟さんなどアメリカのボランティアは頻繁にポルトープランスを訪れ、学校建設支援や、水害被災者支援、米の配付などを行ってきました。しかし、日常の運営は、やはり地元のボランティアに頼らざるを得ません。ズッキ神父によれば、現在月曜日から金曜日まで校務はもとより地域ボランティアと共に炊き出しと物資配付などの事務作業を行っています。様々な慈善活動のうちでも食事の提供は特に重要だと言います。

「人々はあらゆる物を必要としています

。なぜなら彼らは何一つ持っていないからです。子供たちにとって、学校でご飯が食べられないければ、それは一日中何も食べられないことになるのです。子供たちには教育が必要です。また子供たちが教育を受けられれば、ここは教育を受けた社会となり、創造できる社会となります」。

役所や学校が休みになる土日になると、ズッキ神父は本職に戻り、地域の信者のためにミサや洗礼などの宗教儀式を行います。彼の簡素な衣装タンスの中には、いつも慈済ボランティアの制服と聖職者の祭服が準備されています。忙しい

スケジュールのなか、二つの役割を自在に切り替えられるのも、ひとえに共通の「愛」があるからなのです。

「慈済はよりよい世界、よりよい環境、より良い人を創造しようとしています。私たちカトリック教徒も同様のことをしています。愛に勝るものはありません。上人が「誰もが内面に仏性を持っている」とおっしゃるのは、同じ考えからだと思っています。同様に、私の中には神がいます。同じような道理なのです」。

● 去年2月、慈済はハイチの貧民街シテ・ソレイユで住民に2カ月から3カ月分の食糧を配付した。食糧を受け取ると、長い間飢えに耐えてきた女性たちは顔を綻ばせた。(撮影・岑慧意)



ズッキ神父は自らの人生についてこう語っています。「十二歳の時に修道士になると決めて以来、貧しい人に奉仕しようと考えてきました。二十代の時にイタリアの神学院で学び、その後ヨーロッパに留まることも、あるいは他の豊かな国に行くことも可能でしたが、やはり貧しいハイチに戻り奉仕することを選択しました。一九八三年に神父に昇進して以降も、住民に直接奉仕できる末端の教区に留まることを選び、昇進の機会があっても断り続けてきました」。

「主教になれば民衆から遠く離れることになってしまおうでしょう。私には今の

ように人々と一緒に生活しているほうがこの仕事をもっとうまくやれると思うのです」。ズッキ神父はまたこのようにも語りました。

「私はこれまでずっと、若者と一緒にいることで彼らが技術を身につけられるようにしたいと願ってきました。そのため、長年カトリック職業学校を経営したり、貧困地区で奉仕したりしてきました。また慈済ボランティアと出会い、彼らと協力して貧困問題に取り組む中でのかなり改善の余地があることがわかり、新しいことを試みたりもしてきました。ハイチの貧困は外国からの食糧支援で改善でき



るものではありませんが、人の心の善がこれによって目覚めるかもしれません。

米の配給の時に竹筒貯金箱を回すと、誰もがそこにお金を入れるのですよ」。二〇一九年六月末、ズッキ神父はロサンゼルス、カリフォルニア州のサンディエゴにある、ボランティア養成講座に参加しました。その際、東アフリカのサイクロン・イダイ災害支援でハイチの人々が寄せた募金を携えてきたのです。三百ドルにも満たない額とはいえ、支援を受けるハイチ人が「貧困の中の貧困者」から「貧困の中の富める者」になったことがわかりました。「彼らは、貧しい人も人助けができるということを学びました。なおかつそこに

喜びを見出したのです」と、ズッキ神父は顔をほころばせました。

「仏教徒には靈性 (spirituality) があります。それはカトリック教徒も同じだと思います。私たちの内面には似たところがあります」。宗教間の交流について、ズッキ神父はこのように語っています。「カトリック教会は、喜んで他の宗教と協力します。それは互いに同様の信念や共通の目標があるからです」。このような宗教や人種の垣根を越えた愛の心による善行は、政局が混乱し、人々の生活が困窮した貧しい国において、より一層重要であるように思われます。「現在のハイチは宗教の力によって支えられて

いるのです！」と、ズッキ神父は噛みしめるように言いました。

認証を授かるという願いを叶えたズッキ神父は、たくさんの祝福を受けて帰国しました。それは貧困、飢餓、混乱の中へ帰ることを意味します。しかし、信仰の固い彼は決して孤独ではありません。今後の長い道のりには、さらに多くの慈済ボランティアが寄り添い、手助けすることでしょう。彼が人々の苦難を救い弱者を思いやる『聖書』の一章を実行することを。(慈済月刊六三七期より)

●台湾を訪れ、受証して慈済ボランティアとなったズッキ神父。キャンプでその感動と祝福を述べた。(撮影・蕭耀華)

愛と平和を教える校長

心の歩み：信仰と憎しみは同時に存在できない。人々が愛を受け入れる時、彼らはそれを他の人と共有するようになる。證嚴法師が諭してくれたように、私はすべての人間が助け合い、愛し合うことを願っている。

口述・クーマ (Cuma) 通訳・胡光中 整理・葉子豪 撮影・黄筱哲 訳・善耕

シリア内戦が勃発してから、五百六十万人を超える人々が故郷を離れ、そのうち三百六十万人が隣国のトルコに逃れた。二〇一四年、イスタンブールの慈済ボランティアは市内の難民救済を開始し、物資を配付し、治療センターを立ち上げ、マナヘル学校を創設した。中でも難民のクーマ教授は重要な役割を果たし、慈済ボランティアと一緒に、一万を数える難民世帯のための慈善救済を行い、マナヘル学校で三千人以上の難民の子供たちに教育の場を提供した。今年、クーマ教授は台湾に来て、シリア人最初の慈済ボランティアとして認証を授かった。

クーマ・セニア
(Cuma Senya)

プロフィール：
トルコに住むシリア人
年齢・52歳
職業・マナヘル国際学校
(U Menahil Syria school)
の校長
信仰・イスラム教

慈

済もその原則と法脈を持っているように、私たちは、すべての民族とすべての宗教には学ぶものがあると信じている。私は慈済から物より精神が大切であることを学んだ。物質的なものは、与えられると使い終わる時が来るが、そこに宿っていた魂は残るものである。これは、慈済がやってきたことであり、難民に別の何かを与えること、即ち彼らの意識を高めようとしているのだ。つまり、愛、人道、慈悲と智慧に満たされる高みへと導きたいと願っている。

イスラム教と仏教には違いもあるが、例えば倫理、道徳、仁道、善行など、多くの類似点がある。最近、私は台湾での

慈済海外研修会で一つの結論を得た。すなわち、證嚴法師が開示した人生の道理と生活の規範はすべての正しい信仰に当てはまり、善行はどの宗教においても共通している。

これを聞いたとき、證嚴法師はイスラム教徒に改宗してほしいなどと望んでいないわけではなく、彼らがより敬虔なイスラム教徒になって欲しいと望んでいることを慈済人が世に知らせてくれることを私は願った。

イスラムという言葉は、サラームという言葉から来ている。これは平和を意味する。人はアッラーによって彼の代理人として創造され、被造物の中で



最高位に位置づけられた。人には、生まれながらにして平和と善行の本性を持っている。アッラーは『コーラン』の中で、イスラム教徒だけが良い人になるのではなく、誰でも善行をすることができると述べている。

聖人ムハンマドは私たちに「あなたが世間に寄付した十銭は、最後の審判では山と同じくらい価値がある！」と言った。アッラーは人に憐憫を与えて、天国へと導く。天国に行く道は数千、数百あり、すべての方法が利用できる。動物を愛護することも、飢えた人に食べ物を施すことも、たとえ小さな奉仕であってもその行いが天国への導きとなる。

私たちは審判の日に現世での行いに対して審判が下されると信じている。その日、良い人は彼の良い報いを受け、悪い人は悪の報いを受ける。アッラーは厳しい裁きを決定する力を持っている。例えば戦争を引き起こし、残酷なことをした人々に対して裁きを下すのである。また善報を与えることを決定する力もある。例えば平和で愛の種をまく人々に対してである。

『コーラン』には「誰かが一人でも殺すことはみだりに世界を殺すに等しく、誰かが一人を救うことは世界を救うに等しい」とある。『コーラン』では、人々の相互殺傷は明らかに禁止されている。

実際、アッラーは「私があなたをこの世界に送ったのは、すべての人類に親切に接して救うためであり、殺し合うためではない」と啓示された。アッラーのすべての使者には共通点が一つある。彼らは仁慈で、愛があり、平和を愛しているという点だ。イスラムでは、アッラーは善と平和への道を創造している。

アッラーのおかげで、今では慈済マナヘル国際学校の生徒たちは正にたくさんの愛を持つようになった！

●金曜日はイスラム教では「金曜日の合同礼拝」と呼ばれるが、クーム教授（左から1人目）の此の度の訪台では、慈済ボランティアが彼と他のイスラム教徒を伴って台北にあるモスクに行ったので、礼拝を無事に行うことが出来た。



思えば二〇一四年は学校の設立について話し合うためにistanbulのスルタンガジ市政府を訪問した年だ。副市長にシリアの子供たちが今教育を受けられないことが大した問題ではないと思わないでくださいと言った。実際、彼らが文盲になった場合、将来国全体が影響を受けることになるのだ。その時は、警察官と軍隊を増やして、数倍の費用を払っても、社会の安全を保証できるものではない。

●自身もすでに祖父であるクーマ教授（右から1人目）は生徒を孫のように見ている。彼は2018年10月にマナヘル国際学校の校長になり、難民の子供たちに基礎知識とシリアの祖国の文化を学ばせることに取り組んでいる。（写真提供者・余自成）

いはずだ。

私たちは三千人の子供たちを支援したが、これら三千人の子供たちの背後には三千の家庭がある。これら三千の家庭がもたらすものは、将来の三万の家庭の安全と希望である。また、マナヘル学校は、子どもたちを救い、社会全体に安全と安定を提供する機会を与えている。

台湾から慈済が助けに来てくれたおかげで、これらの子供たちは愛の本当の意味を理解できるようになった。あなた方に教育を受けさせたいと遥か遠くから援助に来たのはなぜなのか、それがどれほど得難いことかについて、子供達に話して聞かせた。この善の行いにどう応えた

らよいか、考えてほしかったからである。イスラムは慈悲深い宗教であり、人は皆互いに平和で仲良くするようにと子供たちに教えている。信仰と憎しみは同時に存在できない。だから、愛以外のマイナス思考の考えを持つべきではない。人は愛を受け入れると、更に広めていくことができる。

たとえば私たちの卒業生アハマド・イネドだが、通学リュックを背負って戦火を逃れて来た当時は、トルコで勉強を続けたいと考えていた。到着後は予想外にも毎日の生活に追われて不法就労者になってしまった。そこでは彼は勉強することができなかったので、いつもまだ学

校にいるときの自分を想像していた。

その後慈済が彼を助けて学校に通わせてくれた。彼は援助してもらった金額をドルに換算して小さいノートに記入している。彼は次のように言った。「私より助けを必要とする人々を助けることができるように、私は将来慈済にこのすべてのお金を返したいと思っています。勉強することができなかった私が今では大学へ行くことができ、人生が変わったのですから」。

マナヘル国際学校のは小学校から高校まであり、今年は百三十六人のシリア学生に対してそのままトルコで大学へ進学できるよう支援している。四年

間ですでに大学を卒業して大学院に上がった学生もいる。彼らもボランティアとしてこの社会に還元している。これこそが私たちの希望することなのである。

難民にとってマナヘル学校の存在は、私たちにとつての水と同じくらい重要であるといえる。慈済の援助により子供たちは教育を受けられるようになり、難民の人生もこの学校のおかげで変わり始めている。私たちの感謝を表すことができ、言葉は見つからないが、善行を積むことで、いつか少しでも還元できるように願っている。

また、ここで慈済が行ったことは一つ

の世代全体を救い、彼らを生まれ変わらせたのだということが、いつか歴史に記録され、全ての人に語り継がれる日が来ると信じている。

慈済は世界中の人々が一緒に善行を行えるように働きかけている。今日、私は證嚴法師の認

●シリア人として初めて認証を授かったクーマ教授は、祖国に慈済という善の種を持ち帰る願を立てた。

証を受けに台湾に來た。これは一緒に善行ができるという証である。證嚴法師が諭してくれたように、私はすべての人間が助け合い、愛し合うことを願っている。

この場を借りて心から法師の健康を願っており、私たちは常に法師に感謝している。また、私はすべての慈済人に伝えたい。あなたたちが私の兄弟姉妹であり、祝福されたグループであるから。何時何時までも善意が絶えることのないように、常に善いことをしてください！

（慈済月刊六三七期より）



地震の後に善が循環する その変化は自分から

心の歩み：エクアドルで災害が発生した時、證嚴法師の導きで慈済ボランティアが被災地に駆けつけ、人々に善い方向を示してくれた。私は今、慈済ボランティアになり、もっと多くのエクアドル人を助け、善の循環を絶やさないようにと願っている。

文・陳麗安 撮影・黄筱哲 訳・惟明

ボリス・ガルシア
(Boris Garcia)

プロフィール：
エクアドル出身
マナビ州在住
年齢・37歳
職業・建設業
信仰・カトリック教

南

アメリカのラテン風情に満ちたこの国土には豊富な人文背景と自然

の景色がある。有名なペルーのインカ文明の古城マチュピチュ、そしてサッカー

と情熱的なサンバ・カーニバルで知られるブラジルなどが隣接する。南米大陸の北西部に位置し、太平洋を隔てて台湾とは距離にして一万六千七百キロも離れていながらも同じ「バナナ王国」と言われるこの国は、赤道が国土を横断しているため、スペイン語の赤道 (Ecuador) からその名が付いた。

慈済とエクアドルとの縁は二〇一六年四月に遡る。マグネチュード七・八の強い地震が太平洋沿岸のマナビ州を襲った年だ。慈済ボランティアはカノア地区、マンタ地区、ペデルナレス地区等の被災

地に入り、被災者と復興支援を契機に縁を結んだ。

慈済は災害支援の期間中、「被災者労働雇用による復興制度」を実施して住民に強い印象を与えた。三年来、慈済人医会は幾度も治療を行い、継続的に貧しい患者の病気を治療してきた。強震で崩壊した長い歴史を持つカトリック教会、カノア教会も慈済を含む異なる宗教や国籍の人々の善意と愛の協力の下に今年、完成し、再びカノア住民の心の拠り所となっている。

三年の歳月を経て、エクアドルの地元



アは、去年十一月に来台し、慈済ボランティアの認証を受けた。彼の法名は「本嘉」である。

喜んで隣人を助けたい

十五世紀、エクアドルはスペイン統治の影響で、住民の七割以上がカトリック教徒となったが、ボリスも例外ではな

い。大地震の後、彼は台湾からやって来た。ボランティアで、当時教会再建の背後の重要人物の一人であったボリス・ガルシ

ン。大地震の後、彼は台湾からやって来た。ボランティアである慈済と出会い、色々な

国や地域から来た慈済ボランティアが

与えていたかを目の当たりにした。

数えきれない程の時間とお金を奉仕に費やし、一つの事を成し遂げるために、絶え間なくエクアドルとの間を行き来して来たことを目にした。それは、カトリック教、仏教又はその他の信仰を問わず、地震で困難に陥った人々を助けるためだった。

被災者の支援には物資の配付や義援金など様々な方法があるが、慈済は「被災者労働雇用による復興制度」を取り入れたことで、住民は受け身の援助ではなく、自ら被災後の復興に参加すると同時に収入が得られたのである。そういう方式は人々に尊厳を与え、笑顔を取り戻させると共に、人々の力を結集させることができた、とボリスは思う。

「慈済は他のNGOとは全く違う！」緊急支援の期間中、慈済ボランティアはエクアドルに四十日間余りも駐在した。最初、ボリスは通訳ボランティアでしかなかったが、その期間中、彼はボランティアアたちが住民にどれだけの希望と自信を

このような支援方法は更に住民の考え方にも変化をもたらした。以前であれば、「何故隣人を助けないといけないのか」と思っただろうが、今は自ら進んで他人



(撮影・段岱佳)



(撮影・葉晋宏)

を助け、寄り添うようになった、とボリスが言った。

この劇的な変化は、ボリスを躊躇なく慈済に参加させた。

正しいことは辞せず

ボリスは建設業を営んでおり、仕事は忙しかった。しかし、慈済の任務で彼の協力が必要な時は仕事を脇におき、アメリカの慈済ボランティアと一緒に被災地の視察に出かけた。物資の配付でも施療でも、七日間から半月ほどはかかる。教会の再建期間中、彼は一言も文句を言わ

ず、自宅のマンタ市から教会のあるカナア町まで毎日四時間ほどかけて往復した。

妻のエリサは彼の選択を百パーセント支持しただけでなく、一緒にボランティアとして、教会再建期間中、炊き出しチームに参加し、食材の買い出しや菜食の奨励を担当した。

夫婦二人はいつも仕事と家庭を掛け持ちし、ボリスは朝早くに家を出て、夜遅くまで働き、週末も家族と一緒に過ごせ

●(右の写真 ボリス(右から一番目)は教会の再建工事に携わった住民を励ました。(撮影・葉晋宏)(左の写真) 去年七月、カナア教会が落成し、七百人を超える住民が喜びと共に敬虔にオーブニング・セレモニーに臨んだ。(撮影・段岱佳)

るとは限らなかった。しかし、家族はボリスがしているのは「良いこと、正しいこと」だと分かっており、彼の強い後ろ盾となっていたので、彼は余計にボランティアの任務に専念することができた。

エクアドルのボランティア数は多くないが、ボリスと同じように今年認証を受けたジェニファアは、人々と一緒に学びながら奉仕できることをとても幸せに感じているという。

皆それぞれ異なる地区に住んでいて、普段集まるのが難しく、「距離」が彼らの志業を進める最大の妨げになっている。しかし、ボリスとジェニファアは

上手く週末や休日を使って、車でボランティアが居る所に行って集まり、新人ボランティアに慈善ケアの養成を行っている。

善の循環は止まらない

慈済ボランティアの道を歩むボリスは何も求めていない。「何故なら正しいことをしているから」だという。教会再建の間、何度も障害や挫折を経験し、非難や中傷を受けても「正しいことをする」という信念を持っていたため、周囲の影響に左右されることなく、再建の重責を担っ

ただけでなく、僅か十五カ月という短い期間で教会の再建を果たしたのである。

カトリック教徒の巡礼の旅は世界各地に及び、聖地へ続く路として残されている。スペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路」程有名ではないが、自分が住んでいるマンタ市から二十キロの距離に、まるでムスリムのメッカのように、エクアドル人にとって一生に一度は行かなくてはならない聖地がある。それがモンテクリステイ(Monte Cristi)である。

今のように世代が交代するようになると、宗教信仰の力は次第に弱まり、聖地

への巡礼は時には体力と気力への挑戦になっている。しかし、変わらないのは「善」が信仰の核心であり、多くの人は異なる形式で各自、善の道に向かっていることである。

二〇一六年、エクアドルに災害が発生した時、法師の慈悲に啓発された慈済ボランティアがエクアドルに来た。それによってエクアドルの人々は支援とケアが得られ、人々は互いの交流で良い方に向かい、彼はそれをもって善への道を歩み始めたのだ、とボリスは振り返った。

今、彼は台湾の慈済を訪れている。敬虔な心で養成講座に臨み、学習した後、

●被災地域にあるカノア教会は去年7月再建を終え、ただの地震後立て直した教会だけではなく、住民の心の拠り所である。教会の本堂のほか、神父の宿舎と修道女の宿舎があり、読経用と職業訓練用の教室もある。(撮影・門海梅)



ボランティアの認証を受けたのである。その全てはまるで善の循環のようだ。何故なら、彼はここで学んだ真髄をエクアドルに持ち帰って実践するつもりだから。これから、彼は継続して花蓮に

帰って精進し、学び、エクアドルで助けを必要とする人を助け続ける、と言った。この善への道には終わりはなく、絶えず進むだけだ、とボリスが言った。

(慈済月刊六三七期より)

法の香
に浸る



金剛の体は壊れない

◎ 文と絵・阿板 訳・明陞

ボランティア精進の日が円満に終了したので、師伯^{スベ}（年長の男性ボランティ

ア）たちは大きな円いテーブルを一つ一つ運び出しました。「重いでしょう。手伝いましょう。」と、懿仁^{イレススジエ}師姉が一気に二つも運んだので師伯は驚き、そして感心しました。すると彼女は笑顔で「実は私は金剛守護神なのです」と言いました。「金剛の体は壊れない」と言っても懿仁師姉

は頭痛持ちですから、「壊れない」とはどういう意味でしょうか。

「三千世界の大小の音を聞くと、善悪の音が耳の傍で鳴るのですが、分別がつき、混乱することなければ、道理が壊れることはないのです」。頭に浮かんだのは法師のお諭しでした。「耳根^{にこん}は壊れない」とは、他人に叱られた時、その道理だけを聞き、その他は心に留めないということ

です。そして「壊れない」とは、病気にならないとか悪くならないという意味ではなく、変わらず善に尽力することではないでしょうか？

ですから、奉仕の機会を逃さず、いつでも善力を尽くすことが即ち「金剛の身は壊れない」ということになるのだと思います。

（慈済月刊六三二期より）

● 作者：凌宛琪（お板さん）。慈済基金会の職員で、毎朝の「法の香に浸る」朝会でPCなどの設備セッティングを担当している。そして自身の心得をイラストを添えてインターネットで発表し、分かち合っている。





【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願 絵・陳九熹

この世の衆生と愛を分かち合う

どれだけあれば幸せなのだろうか？

足るを知る人は最も幸せな人です。

幸せに感謝し、喜んで世の衆生と資源を分かち合いましょう。

一分でも愛を集めることは一分の徳を集めることです。

寒

い冬がやってくると、心に浮かぶのは寒冷の地方にいる人たち

です。苦難にいる人たちはどうしているでしょうかと。体に感じる苦しみだけでなく、食料、衣服が足りずに、住まいの屋根を覆う物もなく苦しんでいる人がいます。私たちは実に幸せです。住むところも十分な衣服も、

使う物も充分にあります。どれだけ

の物があれば幸せと言えるのでしょうか？容易に満足のできる人が最も幸せな人です。

幸せな生活の中に浸っている私たちは、遠くに目を向けなくてはなりません。フィリピン南部のミンダナオ島では十月の末に強震が発生して、

殆どの家屋は倒壊し、家を失った人達は、竹竿をわたしてヤシの葉をかぶせ、雨露をしのんではいますが、足元の地面は泥で湿っているのです。いったい何処に住めばいいのでしょうか？幸い慈済人^{ツィチ}は素早く駆けつけ、白米と毛布、折り畳み式のベッドや慰問金を贈り、住民はしばし安心して落ち着く場所を得ることができました。

住民は非常に感動して、こんなに沢山の物を一度に貰うとは夢にも思わなかったと言っていました。大部分の人は慰問金でトタン板を買って倒れそうな家の補強をしていました。

一時的なものです、少なくとも雨風を凌ぐことができました。そして折り畳み式の福慧ベッドで子供たちは安らかに眠ることができました。

慈済の人たちはすべて自前で支度をし、交通機関の困難を克服しながら何度も往復して配付をしたのです。私はとても感謝しています。毎回帰ってくる度に彼らが話してくれるのです。

「被災者の貧困に対して無力な気持ちに陥りますが、駆けつけ、自らの手で届けることができるだけでも感謝しています。私たちの配付したエコ毛布が冬空の下で温かく誰かの身を包ん

でいることに安堵を覚えました」と。

新年の前夜、慈済はラオス南部の洪水災害地域の配付を終えました。白米を届けただけではなく、差し当たつての難関を解決したのです。また、農民が田植えできるような種もみを配付したので、来期の収穫の時には自力更生ができることを期待しています。

現地の実業家たちは、各国から集まって来る慈済人と合流して、慰問金と食糧の準備、運送の手配などをする以外に、菩薩の種子になることを発願しました。ラオスの貧民は慈済の姿を目にした時、簡単に取り繕つ

て帰って行くだけだと思っていました。これほど大量の物資が運び込まれるとは思ってもよらず、それで彼らは数か月の難関を突破して過ごすことができたそうです。配付した人や受けた人、皆が喜びと感動に溢れていました。

地、水、火、風の四大不調の時に生れた私たちは、災害の絶えない地球、撲滅が困難な森林火事や旱魃の地方での食糧難を目にします。広く天下に目を向けると、地球の生態系は人々に世紀の災難が差し迫っていることに警鐘を鳴らしていますが、警戒す

る覚悟は未だ見当たりません。以前私は「間に合わない」と言いましたが、今では「やつても間に合わない」ことを感ずにはいられません。もつと速やかに環境保全を呼び掛け、身をもって実践しなくてはなりません。

人の苦を見て己の幸せを大切にし、誰もが責任を担うべきです。金を惜しむように一滴の水も大切にし、簡素な生活でゴミを減らし、食べ残しを減らすことです。浪費とは幸せを損なうことです。それだけでなく、天下の衆生を愛し、自分も節約し、蓄積されたもので人々と分かち合うこ

とができます。一分の愛が集まれば、一部の徳になり、自分の慧命を大切にすることは、大地の生命を愛おしみ大切にするのです。

天下に災害が起きると、苦難の人達は私たちの支援を待っています。先日私は台北では一杯のコーヒーが百元もすることを知りました。私はコーヒーを飲まず、流行にはついていませんが、苦難の人のことを思うといったまれません。平穏な生活の中で暮らしている私たちが、もしも一杯のコーヒーを節約し、その蓄積されたエネルギーでさらに多くの人を助けること

ができるのではないのでしょうか。

光陰矢の如しと言われているように、新しい一年がそこまできています。精進を心がけ、生命を活かしてこの世で慈悲による利他行為をし、価値を創造している人の姿がそこに見えます。過ぎ去った五十数年の事を回顧し、慈済人が歩んできた道で愛の力が発揮されてきたのを見て、生命とは価値あるものだと感じました。人生を無駄に過ごさず、煩惱もなく、人との争いもなく、社会により多くの温かみをもたらし、お互いに感謝し、尊重しあい、家庭も国も愛護す

るよう呼びかけるのです。

一年に春、夏、秋、冬があるように、人生にも幼年、青年、老年期があり、時間も「日が過ぎると、命もそれに伴って短くなる」のです。今の私は、さらに残された命を大切にして、声が出なければ話す練習をし、足が弱くなれば歩く練習をして一歩また一歩と頑張っており、人生の最期まで使い切りたいのです。常に慈悲で以て他人を利し、日々人間に福をもたらし、尊厳を願っています。

（慈済月刊六三八期より）

書道家・周良敦

心身一体となって法華を書く



●周良敦（右）が創作した『妙法法華経』世尊仏像図の高さは2階建ての階高に相当し、花蓮と中国に出展したことがある。普段は自宅に保存されている。（撮影・游國霖）

書道大家の周良敦は一年かけて、六万文字余りの『法華経』の経文を仏陀の法像の形に書き上げた。制作過程は非常に艱難だったが、「人生の最期の一刻になったとしても、完成させる！」と言う彼は、多くの人がこの「法華経仏像の図」を見に台中精思堂へ来て、自分と同じように法華の精神を体得することを期待している。

高

さ六百六十センチ、幅二百二十五センチで、『法華経』六万字余りの

の経文で仏陀の法像を描き出したこの作品は、書道大家である周良敦が精魂を込めて制作したものである。二〇一九年一月四日、慈濟ボランティア十人が護送し、

台中市永春東路にある周良敦の自宅から文心南路にある台中精思堂に運ばれ、福慧庁に安置された。

周良敦は一九九〇年から仏経の研究を始めた。初めに読んだのは『地藏王菩薩本願経』であった。内容が分かりやすく、



読めば読むほど得るものがあつた。ある日、彼は経本をめくり、地藏王菩薩の法像を見た時、一万七千字余りの経文を書道で菩薩の法像を描く考えが芽生えた。

四か月半を掛けて描き上げた作品が新聞で報道されると、大勢の人が鑑賞に來たため、彼はこれを契機に自信を持つて、百八回、合計二万八千八十文字の『心経』で觀世音菩薩の法像を描いた。その後、彼は『論語』で孔子を描き、その作品は故宮博物館に収蔵された。

●2018年8月に台中靜思堂の文化センターで開催した「法味生活芸術観覧会」をテーマとした芸術祭において周良敦が自分の作品『前赤壁賦』を紹介している。（撮影・王秀吟）

ある年の夏休み、周さんの奥さんが親戚を訪ねに花蓮に行った時、帰りの電車の中で、慈濟ボランティアの静淇と隣合わせになった。会話するうちに静

淇は彼女の主人が書道を教えていることを知った。そして数日前にテレビである人が書道で二つの仏像を描いた話をした。彼女はバッグから一枚の写真を取り出した。「何故この有名な方と写真が撮れたのですか」と静淇は驚いて訊ねた。テレビで見た人は自分の主人だと静淇に言った。

そこで静淇は、もし縁があれば、周先生に『法華経』を書いて欲しいと頼んだ。

周良敦は静淇からヒントを得、その経は世の中の人々を教育するだけではなく、仏陀が入滅する前に弟子に講じたものだと思い、描く計画を立てた。

周良敦は十六年間公務員として勤めた榮民工程事業管理处を退職し、創作に専念した。何創時書道芸術基金会の会長である何国慶氏が彼の決意を聞いて、励ます為に彼に三百年の歴史を持つ乾隆時代の画紙を贈呈した。それは何氏が所蔵していた四枚の内の一枚だった。

『法華経』の書写は大仕事で、大きなチャレンジでもあった。長さ約七メートルの紙を広げるとミスは許されない。書

き始めると春夏秋冬を通して行うことになり、夏場はエアコンを使わず、そよ風を背中に受けるしかなかった。

一センチの文字の大きさを揃え、墨汁の色を均一にし、濃度も垂れないようにしなければならぬ。どうあっても書き始めたらミスは許されない。紙の性質まで理解しなければならなかった。

周良敦は何度も墨の研ぎ加減を試みた後、一回墨を研げば六十文字から百文字書くことができ、注意が散漫になることもなくなり、禪定により心身の統一が保たれるようになった。

講義する時以外、彼は殆ど外出せず、四

カ月下半書きして、七カ月半掛けて作品を完成させた。一九九二年に作品を完成させるまで実に、一年以上の年月が経った。

書道に打ち込み、淡泊な生活を送る

子供の頃、周良敦は丁寧に鉛筆で文字を書いて先生に励まされたため、成人した後、綺麗な字を書くという職業に就くことができた。その為、彼は書道に対して独特の情が芽生えた。三十歳の時、彼は書道大家の陳其銓に師事し、一年も経たない内に台中市と台中県の合同書道コンテストに参加して一等賞を取った。

それは彼が書道を始めてから初めて参加したコンテストで、初めて取った賞である。その後、彼は清水紫雲巖で開催された全国観音杯書道コンテストに参加し、またも一等賞を取った。

陳其銓は周良敦の書道に広い門戸を開けてくれた。周良敦も倍の努力をし、仕事の合間に書道の練習に打ち込み、終に十三種の書体をマスターし、書道教室を開くまでになった。

書道で有名になった周良敦は、成功の秘訣は「努力」だと思っている

●自宅で書写する周良敦。彼は、心さえ鎮めていれば、いつでも、どんな状況下であっても彼の書写に影響することはないと言っ。(撮影・施龍文)



彼が幼少期を送った一九五〇年代、アメリカの援助は生活が貧しかった台湾の人々にとって救いの雨だった。援助でもらった「米中協力」の文字のある小麦粉の袋を再利用して作った下着を着て街中を走り回っている子供をよく見かけた。周良敦は貧しい家庭に育ち、一家九人は花蓮に住んでいた。両親は家賃が払えなかった為に大家に追い出され、一家はより安い家賃の所を転々とした。兄弟四人が履いていた下着は「米中協力」の小麦粉の袋ではなく、葬式場から払い下げられた垂れ幕の布地で出来たものだった。客が家に来る時は笑われないよう、それ

を着て客間に入ることは許されなかった。貧しくても、周良敦は常に向上心を持つよう自分に言い聞かせていた。母親はこの二番目の息子は生来、活発で頭がいいと分かっていたので、彼があまりに才能をひけらかすことで嫉妬を招くのを一番心配した。「多くの場合は、知らないふりをしなさい」と言い聞かせたことがあった。

周良敦は母の言葉を肝に銘じて、後に書道界で有名になっても、依然として書道を教えたり、練習をし、時には筆を執って公益活動に参加したりして、芸術家としての簡素な暮らしを送っている。

書道は芸術精神と人文を兼ね備えるべきだと思っており、作品の値にはあまり拘らない。「書道は人格が大事で、カッコ付けることなく、着実であればいいのです」と言った。

一九九四年、彼は台中刑務所で受刑者に書道を教える要請を受けたが、それは技能よりも人格を重んじられたからである。彼は受刑者の良き師であると共に友として教え、彼らにコンクールへの参加を勧めた結果、多くの良い成績を残した。また、彼は台中市政府文化局に生徒たちがストリート・パフォーマーを審査する機会を与えられるよう働きかけた。「先

生はこれ以上の成功は要りません。貴方達の成功は私の成功でもあるのです」と彼は常に生徒に言っていた。

また新しい生徒には「ここに入った訳を今も出所した時も私に言う必要はありません。何故なら、私が知りたいのは現在の貴方と未来の貴方で、私は貴方達を誇りに思っているからです」と語りかけた。

今生を大切にして全力で臨む

「法華経仏像図」が台中静思堂に安置されてから、一週間後の一月十一日に丁度證嚴法師が「歳末祝福会」を主催する

為に來られた。一九九三年、その作品が
花蓮文化センターに展示された時、法師
も見に來られた。今回は台中靜思堂で展
示できることを周良敦がとても光榮に
思った、「慈濟のこの大きな殿堂で『法
華經』を再度展示できたことをとても光
榮に思います。この作品は經典と仏像を
一つに表したもので、人々は經と仏像を
同時に見ることが出来ます」。

『法華經』は二十八品の章節によって

構成され、周良敦は作品を通して世の人
に經文の意義と法華の精神に触れてほし
いと期待した。「この作品を制作したこ
とが私の功労だと言いたくありません。
ただ、この作品を創作した過程は苦勞の
極みであり、皆さんに勇猛に前進する精
神をもたらすことができれば満足だと
思っています」と言った。

この作品を台中靜思堂に展示できた
のは、志玄文教基金会台中終身學習教育
センターとの関係からだっ

た。各地の社会教育セン
ターは年度末に一、二日間
の作品展示会を開催して

いる。人文を深めるには
長い時間をかけて馴染ま
せる必要があると台中社
教対外担当の洪美麗^{フンメイリ}は考
えた。そこで一カ月間に
及ぶ芸術祭を企画したの
である。

二〇一八年八月に開催
された芸術祭のテーマは
「法味生活芸術鑑賞会」で、
社会教育センターの先生

●10人の慈濟ボランティアが
守る中、「法華經仏像図」は周
良敦の家から台中靜思堂福慧庁
に運ばれた。(撮影・游國霖)



らのプロの作品が多く展示された。その中に、周良敦の大型作品である『前赤壁賦』が壁一面を掛けられていた。そこには一気に書き上げた行草書体の気迫がみなぎっていた。開幕当日から人が溢れ、多くの書道愛好家が鑑賞に訪れた。

展示会場は繊細且つ優雅に飾られ、芸術と人文の雰囲気兼ね備えていた。そして周良敦を感動させたのは、『前赤壁賦』を背景にした開幕式の企画であった。「あなた方の誠意は私にとって思いも掛けないことでした。これは一般の展示会場では容易に作り出せない雰囲気です」。

「もし一つの国に一枚の文化の壁があ

れば、他の文化水準もそれに伴って向上するでしょう」又、「皆が慈済の文化についていけば間違いありません。生活の質も向上します」と彼は感動のあまり、来賓にこんな話をした。そして、「もし縁があるなら、もっと大きな作品である『妙法法華経』の世尊仏陀像図をここに展示する機会が訪れるかもしれません」と彼は言い続けた。

洪美麗は彼の話を聞いても余り自信がなかった。何故なら「法華経仏像図」の高さに合う展示会場を探すのは難しいのだ。しかし、『前赤壁賦』だけでこれだけの人を台中静思堂に引き付け、慈済を

理解してもらえることができたのである。洪美麗は周良敦のこの話が忘れられなかった。

夢が実現し、洪美麗は感極まって涙を流した。『法華経仏像図』の展示を機会に中部地区の弟子たちは上人の期待の下に、慈済人の心を結集し、真の大乗佛法を実現させる決意を表しました。安心してください。これは私にできることです」。

仏法を生活の中に取り入れ、慈済ボランティアが世界各地で苦難に喘ぐ衆生に奉仕していることが即ち菩薩道を歩んでいることであると同時に、法華の精神でもある。周良敦は決心して「たとえ死ぬ直

前まで掛かっても完成させるのだ！」と自分に言い聞かせた。彼はただ作品を展示するというだけでなく、もっと大切なのは見に来た人に法華経の精神を理解してもらい、何ごとに対しても全力を以て臨む気力を持つてもらいたいという願いがあったのである。それは生活や仕事の上で大きく役立つはずである。

周良敦は法華の精神を以て人々を励ましている。「人身は得難く、仏法は聞き難い、人生を惜しんでこそ無駄には過ぐすことはない。このように、為せぬことはなく、何事も不可能ではないのではありませんか？」（慈済月刊六二九期より）

己を小さくすれば愛される

李英秀^{リー・インシュ}さんは結婚すれば円満で幸福な人生を送れると思っていたが、自分の気の強さで周りの人を傷付けていた。彼女は無明を一枚一枚剥がした時、まるで玉ねぎの皮を剥く時のように涙と鼻水を流し、最後にやっと清々しく全身がすっきりとした。

一〇〇一年の「九一一同時多発テロ」

が全世界を震撼させた。その年、

李さんの家庭でも嵐が吹き荒れていた。

結婚して二十年、「パパが浮気している」

と子供に告げられた時、彼女の世界も青天の霹靂のように揺らいだ。

厳しく育てるほど、

子供は遠くへ行ってしまう

台南の大内郷に生まれ、長女だった李さんは小さい頃から姉御肌で、何かにつけ弟と妹は罵られた。彼女は中学校を卒

業すると、騒々しい生家から逃れるために紡績会社に勤めた。三年が過ぎた頃、彼女は白馬の王子に憧れ、「結婚すれば働かなくてもよく、楽しい幸せな日々を過ごせる…」と夢に描くようになった。

十九歳の時、叔父からの紹介で結婚の願いが叶った。

彼女は一心に主婦となって、二男一女を育てた。夫は下請け工事の関係で、いつも出張先で宿泊し、月に一回しか家に帰ってこない時もあった。減多に会えない夫を見ても、彼女は、一緒にいる時間を大切にしないばかりか、文句ばかり言っていた。家庭を支えている辛さを夫に分かつ

てもらい、慰めてもらいたいばかりに、きつい語気と態度でいつも言い争いした。彼女の生活は子供第一で、片時も目を離さないほどべったりだったため、逆に子供に嫌われた。

「自分の子育て法は親に教わりました。どこが間違っているのかも言わず、すぐ叱ったり叩いたりしました」。彼女は悪い友達と付き合うのを心配して、子供たちの外出を厳しく制限した。定時制の学校に通う子供に、放課後まっすぐ家に帰るよう言いつけ、コミュニケーションを取ることもしなかった。子供の気持ちを考えることもなかった。

下の娘の張雅柔^{チャンヤロウ}は彼女を避けるようにしていた。中学校の時、家に戻ってもママが家にいると挨拶もせず、さつさと自分の部屋に閉じこもった。娘によると、親子間で口をきくとすぐ喧嘩になってしまいうから、そうした方が「災難」が少なくなるのだそうだ。

李さんも緊張した親子関係を改めなかったが、要領が分からなかった上、子供の行為が逸脱するのを恐れて、親としての権威を振るって制限するしかなかった。

親子関係が膠着状態に陥った彼女は三十九歳の時、夫の浮気を知って大き

な打撃を受け、彼女の顔から笑顔が完全に消え去り、子供との間はそれまで以上に敵対的になった。「ママはパパへの憎しみを私たちの身に振り向けていました。ママはとても苦しんでいましたが、私たちも面白くありませんでした」と次男の張克強^{チャンコーチアン}が当時のことを振り返って言った。

夫は知り合いの保証人になって、自分の家を銀行の担保にした。この「わが家」を守るために、三人の子供はアルバイトをしながら定時制の学校に通うことを選択した。その後、また夫は商売の資金調達のためにヤミ金融からお金を借り、遂



に借金を李英秀と三人の子供に残して夜逃げしてしまった。

「夫とは喧嘩の日々は、言いたいことも言わず、恨みと憎しみだけでした。遂に夫は全く家に帰らなくなりましたが、彼の借金を返済し終えた

●以前パソコンが使えなかった李英秀は、真剣に勉強した結果、今では西橋リサイクル拠点と花蓮静思精舎をオンラインで結び、「晨語」番組を放映する重責を担っている。

後、やっと偶に家に顔を出すようになった。李英秀が言った「うになりました」と李英秀が言った。夫婦関係は暗礁に乗り上げ、家計も危機に面していたため、彼女は家から出て、自分と子供たちのために第二の人生である美容師になることを決意した。



●以前、美容師となって家計を支えた李さんは、今訪問ケアの時に必要とあればいつでも散髪をしている。（撮影・俞柏清）

まず相手を許す
言ったことは実行する

「運命を改善したいのなら先ず善行すること」。李さんはある有名な人の言葉を思い出し、美容院で慈済ボランティアの鄭涵憶^{ツンハンイ}さんと知り合った後、直ぐに慈済会員になり、毎月寄付するようになった。

鄭涵憶は彼女を思い遣り、家の事情に関心を寄せ、大愛テレビの番組を見るよう勧めた。「家に帰ってもぼんやりしているだけだから、大愛テレビで何を演じているか見てみよう……」と思った。暫

くして、李さんはやっと大愛テレビ番組を見た。静思語の「心に愛があっても、行動の中に愛がなければならぬ」という言葉が出ていて、彼女はそれを聞いて反省し始めた。「以前の自分はとても気が強く、人の話が耳に入らず、何もかも目障りでした。心には愛があっても、表現できなかったのです」と言った。

鄭さんと一緒にリサイクルステーションに行き始め、環境保全に力を尽くし、家族や周りの人に愛を与えることを学び始めた。

「実践すべきだとは分かっていました。が、随分悩みました。自分の好きな人を

愛するのは簡単ですが、好きでもない人を愛するのがとても苦痛でした」。李さんは、夫を許すばかりでなく、子供たちにもパパを尊重するよう勧めなければならなかったのです。

初め子供たちは、ママがパパを甘やかしている、ママの頭が可笑しいのでは、と思っていた。李さんは毎日、慈済の「四神湯」（足を知る、感謝する、善に解する、寛容になる）精神で夫に接し、できる限り夫の長所を子供に話して、夫の立場を理解してもらうようにした。次男の張克強は次第に家庭に責任を負わなかったパパを拒まなくなった。「ママは

訪問ケアに行った時にもっとひどいケースを見て来ました。私たちのパパは少なくとも私たちを育ててくれたのです」と言った。

下の娘、雅柔は両親が離婚するよう主張していたが、軍隊に志願入隊してからは軍隊生活を経験して大人ぽくなった。そして「ママは慈済に入ってから、静かに私たちの話を最後まで聞いてくれるようになり、無理強いしなくなりました。また、人生は無常なもので、人と争わなければ、心が穏やかになる、とまで言うようになりました」と言った。

「人を許すことは、自分に優しくする

こと」。李英秀はいつも静思語を思い出しては使い、人間関係を円滑にすることに努めた。母子はたまに帰って来る「一家の主」に対して、別世界の人を見るような目で見ることはなくなり、尊重する態度で接するようになった。次男の張克強は結婚する時、自分から電話でパパを招待した。

善の門をくぐる

誰もが修行している

謝英美師姐の勧めで、李さんは慈済ボランティアの養成講座に参加し、

二〇一〇年に慈済委員の認証を受けた。小家庭から慈済という大家庭に入り、多くの人や物事の挑戦を受けている。

平日、美容室を経営している李さんは、協力チームのリーダーを引き受けた。認証を受けて間もない彼女はチームメンバーをまだ完全に知り尽くしてなかったが、活動がある時は人員を動員しなければならなかった。「よく客から『電話を掛けるのを後回しにして、私の髪を先にしてちょうだい』と言われましたが、葬式や助念する人員を先に探しておかないと、落ち着いて仕事ができないのです」と言った。

チームメンバーに
連絡する前に、先ず
メンバーの都合の良
い時間を知っておか
ないといけない。誰
が平日に時間があつ
て、誰が休日しか参
加できないか。まだ
状況が飲み込めてい
なかった彼女は、「勇

●57歳の李英秀さんは
1歳を過ぎた孫娘を連れ
て、一緒に夜間のリサイ
クル活動をしている。



猛に役割を担い、喜んで合わせる」と単
純に考え、皆もそうだろうと思っていた。
手伝ってくれる人が見つからなかった
時、初めて「大変なことになった」と気
付いた。

「電話を掛ける時も耐え忍ぶ修行が必
要で、一部のメンバーはつつけんどんに
ものを言うのです。特に私が認証を受け
たばかりの時、多くのメンバーは私のこ
とを知らず、互いの間に愛が存在してい
なかったため、とても大変でした……」。
彼女の悩みを聞いた謝師姐は、早速人を
探し、時間を割いて自ら運転して連れて
来た。状況がよく変化するボランティア

の仕事に対して、「一人前になるには、
心から善意を示すことです。今日参加で
きなくても、いつも参加できないとは限
りません」と謝師姐は彼女に教えた。

謝師姐の励ましに抛り所を感じ、努め
て役割を引き受けて円滑に物事を進める
ことで、自分の心を落ち着かせると同時
に人の心も落ち着かせた。「全ての人が、
修行が出来てから慈済に来るわけではな
い」と彼女は行動しながら人生を理解し、
少しずつ自分の考え方と態度を修正して
いった。

「もし私を訓練してくれる慈済道場が
なかったら、『我』執をなくすことはで

きなかったでしょう。私の性格はとても強く、自分で変えなければ、誰にも変えられません」。彼女は思うように家庭がうまく行かなかったことを経験した後、夫の浮気を許すと共に腰を低くして親子関係を修復し、協力チームリーダーを務めたことで成長してきた。しかし残念ながら、さらに大きな試練が彼女を待っていた。

痛くても善い事は続ける

二〇一二年、彼女は健康診断で甲状腺腫瘍と告げられ、関節リウマチも罹った。

穿刺検査の結果、悪性だと分かったが、「大した事はなく、取り除けば大丈夫だろう」とぐらいに彼女は思った。

落ち着いて手術を受けたが、手術後の痛みで生活にいろいろと支障をきたすようになった。跪くのも立ち上がるのも大変で、肩全体がこわばり、手足の関節が痛んだ。

「ひどい時には触ったり風に吹かれるだけで痛みました。毎日薬を飲み続け、顔がお月さまのように丸くなくても体は痛みました」。彼女は健康の大切さに気付いた。以前、動作が速かった彼女は手術後、足を地に付けるだけでも激痛が

走った。しかし、彼女は気丈にベッドから下りて、痛みを我慢しながら歩くと、脚の筋肉が解れてきて痛みが和らいだ。影のように付きまとう痛みは、彼女の意志の強さを試しているようだった。

二〇一四年、李英秀は美容院を閉め、慈済の事に専念し、リサイクルステーションを第二の家とした。各種の活動でメンバーに参加を呼びかける役目を持っているが、自分も基本的なメンバーであり、必要な部署があれば、どこへも直ぐに駆けつけた。暫くして、体を動かせば動かすほど健康になってくることに気付いた。

「痛みは我慢できる範囲内なら薬を飲まないことにしています。薬を飲まずに毎日ボランティアをしたいのです」。多くの病は心理的な要素から来ていると彼女は思う。プレッシャーは内分泌の失調をもたらすと医師も言っており、彼女はできるだけ心を調整してプレッシャーに立ち向かうことが根本的な解決方法だと思った。

私は変わった、
世の中に難しい事はない

心を調整するにも「心の法」が要る。

李さんは「暁に目覚め、法の香に浸る」活動に参加し始め、證嚴法師の法語で自分の無明の悪習を浄めている。

台南市永康区西橋リサイクル拠店では二〇一四年から、花蓮靜思精舎とネットを通じて、ボランティアたちは毎朝五時二十分から證嚴法師の朝の開示を聞いている。

朝起きたその瞬間から氣力を養うと共に、長期間、仏法の香りに浸って来たことで、彼女は自分の能力と忍耐力が増したと感じている。以前、悩んでいたことが消え、困難だったことも些細なことに変わっていた。

次第に自分の心が浄化され、傲慢さが取り除かれていきました」。

もし法水で清められていなければ、自分分はもはや変える必要などころはないと思っていた。今の彼女は他人の邪魔にならないようになるまで、自分を小さくすることを学んでいる。

「歩むうちに、外の世界が自分の考えているものと違うことを発見し、物事を見る角度も広くなります。身内であっても法縁者との関係であつても、人間関係がよくなりました」。法の香に浸る活動に参加していると、彼女はある日突然、善に関する話が上手にできるようになっ

「私たちは自分を見下し、やり通す能力がないと自分で思い込んでいるのです。慈済道場のお陰で、私たちを強くし、人を善に解釈し、寛容になったことに感謝しています。慈悲心で人、事、物を見ると全てが違って見えるのです」。彼女は微笑んで、分かりやすく自分の感じたことを話した。

「以前はそれほど智慧に富んでいませんでした。というのも、協力チームのリーダーを引き受けてから、法の香に浸る活動に参加しなければならぬというプレッシャーを感じていたからです。初めは『宿題をした』という気持ちでしたが、

た。仏法の薫陶の下、彼女は何が欲望で、何が必要なものが判断できるようになった。物質的、金銭的、精神的領域で何も追求せず、煩惱を放下して心安らかに自在になることができるのだ。

李さんは慈済に入ってから状況を玉ねぎの皮を剥くことに例えた。身に付いていた無明を一枚一枚剥き、玉ねぎの皮を剥く時には涙と鼻水を流すように、最後には身も心もすっきりするのである。「こうすることで、自分の足りない部分が見え、自分を小さくすることができるのです。これが私の収穫です」。

（慈済月刊六三三期より）

寂しいお年寄りの年明け

年末の賑やかな一家団欒が終わり、子供達が職場に戻った後の静けさがたまらない。親たちは気分が落ち込み、ため息が出る。これを思い過ごしと一言のもとに無視するのではなく、直ちに寄り添うことで、「空の巣症候群」にならないようにするのである。

、 つもは一人暮らしの七十歳近い陳

い お婆さんは、体は丈夫である。去年の旧正月には一家団欒のために里帰りしてきた娘たちのために大忙しだった。五連休の間、みんなの食事やら寝具の用意やらで独楽のように動き回り、相変わ

らず元気いっぱいだった。

旧正月五日、子供たちはそれぞれの家に戻って行った。陳お婆さんは、冷蔵庫の中の残り物や、使った布団を見ていると、急に胸が苦しくなった。少し休んだ後に片付をしていると、全身の筋肉が痛

み、だるくなった。

陳お婆さんは、すぐに病院の家庭医学科に掛かり、心臓を検査してもらったが原因は分からなかった。翌日、娘に付き添われて台北慈濟病院で検査をしたところ、精神科の王慧懿先生は「空の巣症候群」と診断した。生活習慣を調整するように言われた。娘さんによくお婆さんに氣遣うよう助言した。一カ月間通った後、お婆さんは次第に元氣を取り戻した。

王慧懿医師によると「陳お婆さんのように一家団欒を楽しんだ後、子供達がそれぞれ帰って行った後、元気がなくなり、筋肉痛とだるさを感じて息苦しくなったという症状は、何かを引き金となって発

症した情緒的な反応で、医学では『喪失発作症状』と呼ばれています。たとえば家族やペットがなくなった時、または節句の後の孤独感から引き起こされる情緒反応で、直ちに治療を受けないと症状は持続し、うつ病になりかねません」。

自分で喪失感を調整する

「空の巣症候群」とは、子供が成長して家を離れた時に親が寂しく孤独感を感じることを言う。親は子育てする必要がなくなっただけで自分の存在価値が低くなるために起きる、様々な情緒の問題である。よく見られるのは、孤独感、悲壯観、元

気がない、不眠症、頭痛、全身の筋肉痛、食欲不振、消化不良、胸の圧迫感、息苦しさなどである。これらは通常短期的な症状である。

時間をかけることで回復できる人もいるが、一部の人はタイムリーな治療を逃すと、さらにうつ病あるいはそれより深刻な生理的病を引き起こすと王慧懿医師は言う。

高齢者は殆んどが定年退職しており、精神的に集中できるものが少なく、また長時間一人暮らしすること、うつ病にかかる割合が高まる。臨床では、「空の巣症候群」が著しい患者には薬を処方したり心理指導し、状況が軽い患者には生

活習慣を変えるように勧めることで症状を抑えていくことができる。

王慧懿先生による「空の巣症候群」改善の勧め：

規律正しい生活をする：規律正しい生活は、老人の心を穏やかなにし、節句の時の興奮状態を和らげ、「空の巣」寂しさ」から抜け出すことができる。

趣味を持つ：山歩きや旅行、絵画、撮影など興味のある活動に参加したり、ボランティア活動することで節句後の虚しい気持ちを方向転換させる。同じ趣味を持つ友達ができ、生活が多元化して豊かになる。

互いに思いやる：現在、IT製品によ

る通信が便利になっており、親と子が相互に電話をかけたり、動画会話すること、で思いやりを伝え合うとよい。

医師は親を持つ人にこう注意を喚起している。両親の身心の変化に注意し、上記のような症状が現れたら、「思い過ぎ」だと一言で無視してはいけない。細かく気を配り、愛と温かさを感じさせることが大切だ。症状が重い時は、専門医の診察を受けさせ、遅延によるより深刻な病気を引き起こしてはならない。規則正しい生活と趣味を持つことで「空の巣症候群」に陥らず、シルバーライフを楽しむようにしよう。

(慈済月刊六二八期より)





喜びの日々

日々この世を利する善行を行えば、
日々喜びに満ちるようになり、
こういう人生こそ価値がある。

◎文・釋徳仇／訳・済運

喜びの地から法雲の地に

精舎に戻った高雄の慈濟人が上人の前で発願しました。

「あなたが私の前で発願するのであれば、私も菩薩の前で発願します。『仏教の為、衆生の為』にこの人生を費やしましょう。この願はまだ成されていないので、今も精一杯努力しています。『衆生の

為』では、私の言うことを皆さんが実行に移してくれていて、とても感謝しています。『仏教の為』に関しては、私はまだ正信の仏法をあまねく世に広めていません」と言いました。

上人は近代に伝わった仏教信仰について話しました。民間信仰と結合した結果、多くの人は線香を持って仏や菩薩に自分の幸福や平穏を求め、こういう儀式が仏教信仰だと思い込み、真の仏教精神を理解していません。

「仏は人に拜んでもらい、頼みごとを受ける偶像ではありません。仏法は仏が説いた精神理念であり、とても超越したもののなのです。深く考え、体得に値する妙法であり、真実なのです。私たちは仏法を復興させる使命と責任を負っているのです」。

「この時代に正法を復興することは非常に困難なことは分かっている

ます。しかし正法が荒廃しているが故に、逆に新たに始めるチャンスがあるのです。例えば古い市街地のように、壊れなければ、新たに企画整理して広い道を作ることはず、整然とした建物を建てることもできません。従って、悪世末法の世は正に仏法を再建する時なのです。しかし残念なことに私には時間は残っていません。唯一できることは、皆さんが引き継いで各地の慈済道場をしつかり守り、莊嚴なものにして訪れる人に喜びを与えられるようにすることです。菩薩のいる場所が喜びに満ちる地であり、一旦誰かが喜びに満ちた地を踏めば、私たちは徐々に彼らを深く導き、各地で法雲地（注）にまで導くのです」。

上人は「粽（チマキ）の紐」を手にしながら法脈宗門の脈絡を説明しました。

「以前にも『四法四門四合一』について話しましたが、今度はこの『粽の紐』を見てご覧なさい。法門がいくつあっても全ては法脈の源に回歸するのです。三足す一が四合一であり、協力、互愛、和気の各チームが心を合わせ、合心という紐で束ねられているのです。そうでなければチームはそこから脱落してしまいます。即ち粽の葉で米と具を包み込むことはできず、包んだとしても紐で束ねなければバラバラになり、形作れません」。

「以前はベテラン委員が迎え入れ、先頭に立って付き添い、自分たちが熟知した後にも他の人を迎え入れて付き添い続けました。正に粽の紐のように、一つずつ粽を縛っているのです。一つひとつの粽は一本ずつ紐で縛られ、源に結ばれているのです。一本一本の紐が

（注）仏教用語で、大乘菩薩が修行する第十の階位。

絡み合うこともなく、整然と源に結ばれていれば、そこを中心にして全部持ち上げることができるのです」。

「委員たちが地域で会員を募集したり、愛の募金をすることは、粽の葉に米や具を載せるようなものです。散り散りになった社会資源を集めているのです。粽を上手に包むにはそれなりの方法が必要です。それは体系から来ており、事を成す時は規則と規律を守らなければなりません」。

規則や規律は精神理念から来るもので、システムをはっきりさせ、団体の運営がスムーズにいくようにするのが目的ですが、一人ひとりの慈済人が心に法を取り入れ、普段互いに交流する中で各自が持っている法脈宗門の精神を発揮するのです。皆で推薦した「四合一」の幹部は誰もがよく知っている法縁者ですが、人にはそれぞれの習気があるのは仕方ありません。そこで、足ることを知り、感謝し、

善に解釈して包容の精神を持てば、人と心をつなげ和気藹々と、互いに愛で以て協力し合うことができるようになるのです。

上人によれば、仏陀の教えはとても奥深く、宇宙に精通しており、森羅万象をも包み込みます。しかし、その中心となる精神は至って簡単で、『真空妙有』なのです。上人は子供の頃から単純で、家にいる時は幼い兄弟の世話をし家庭の重責を担っていました。出家してから天下の重責を担い、一生重責を担い続けているのです。

上人は推薦された慈済人を励まして言いました。

「生命の価値を大切にしなければいけません。もし誰かに幹部の仕事が推薦されたなら、正しい認知と方向を維持すれば『進んで行くことで喜びが得られます』。そして毎日、世を利することをしていれば、常に喜びに満ち、自分のしたことにも喜びを感じます。それでこそ価値があると言えるのです」。(慈済月刊六三七期より)

慈済大記事一月……………

訳・済運

01・01	◎慈済基金会は「2020愛の日の出・海を守る」活動を催し、500人余りが花蓮の七星潭海岸を清掃し、約374キロ分のごみと資源を回収した。 ◎大愛テレビ局はエコ活動で以て開局22周年を祝った。中国文化大学及び台北城市科技大学の慈青社と新北市の淡水沙崙海水浴場を共同で清掃し、高雄岡山慈済志業センターでは「菜食夜市活動」を催して菜食とプラスチックの減量による環境保全理念を呼び掛けた。
01・02	インドネシアのジャカルタとその周辺地域は年末年始に豪雨に見舞われ、水害が発生した。インドネシア支部は2日から支援活動を展開し、カプク河口、ベカシ、タンゲランなどで炊き出しを行い、米や即席麺

01・06	◎台北慈済病院と台中慈済病院及び嘉義大林慈済病院は2019年度「予防医療ケアカウンセリングの推奨プロジェクト」における模範機構としての役割を引き受け、「病人自主権利法」を広める手伝いをしたことにより、本日、衛生福利部から「優良模範機構」の表彰を受けた。 ◎マレーシア、クアラルンプール慈済国際学校の落成式が行われた。当校はイギリスの教育カリキュラムIGCSEを主軸に、慈済人文教育課程を補助として授業が行われ、生徒が多くの学科と人文精神を学ぶことを目標にしている。第1期生として幼稚園、小学校、中学校の生徒750人を募集する。
	及び飲料水などの物資を配付した。また、3日にはジャカルタ州政府と水害支援で協力する覚書を交わした。

01・15	◎政府の法務部と教育部、国立自然科学博物館はロータリークラブと慈済大学の資源を結集して、「薬物使用は一瞬の思い次第」と題した反薬物行動博物館の展示会が2018年5月28日から台湾全土で巡回展示されているが、本日より3月1日まで宜蘭縣羅東町の宜蘭餅發明館で展示され、動画を使って反薬物の観念を宣伝する。
01・12	慈済基金会と台南市政府は、慈善ケア、防災教育、生態環境保全、公益人文などの項目で2年間、双方の資源を使って協力する覚書を交わした。
	チームが、10日から14日までオブレノバック、クルニアッチャ、アダセヴィッチ、シド、プリンシポワッチ、キキンダ、ソンボールなどの難民キャンプで3800人に対して配付活動を行った。

01・10	◎オーストラリアの森林火災は引き続き燃え広がっているが、ゴールドコーストとシドニーの慈済ボランティアは集まった募金44万豪ドルを分割して、10日にクイーンズランド州消防救急センター(Queensland Fire and Emergency Services)、20日にはニューサウスウェールズ州農村消防署(New South Wales Rural Fire Service)に贈呈し、消防車購入資金に充てた。また、メルボルンの慈済ボランティアは16日、ビクトリア州スワン町に出向き、現地に駐屯している消防人員を見舞い、200人分の衛生用品パックを届けた。 ◎慈済基金会のセルビア共和国内の難民に対する冬季衣類の配付は5年目を迎え、ドイツ、オーストリア、ボスニア、セルビア、台湾、シンガポール、マレーシアなどからの慈済ボランティアで構成された慰問
-------	--

	◎慈済基金会は第9回中国公益節の7つの賞を獲得した。「2019年度公益推進力大賞」と「寒気の中、暖を贈る」、「新芽奨学金」、「拍手する手でリサイクルする」の3つの公益賞、そして「四川達州のお婆さんたち」の公益人物賞である。その他、2本の短編動画「自立」、「愛で夢を叶える」が公益映像賞を獲得した。
01・16	2019年11月26日、アルバニアでマグニチュード6.4の地震が発生し、数百棟の家屋が倒壊し、1万人以上が住む場所をなくした。慈済基金会は12月中旬、当国ティラナ市社会局と駐イタリヤ台北代表所から支援を要請する手紙を受け取った。ドイツ、オーストリア、セルビア、台湾、シンガポール、マレーシアなどの慈済ボランティアが2020年1月にセルビアで難民への冬季衣類の配付活動を終えた後、本日、アルバニアに行き、ドウレスとディラナなど大きな被害を

	受けた地域を視察した。また、それと同時にハマラジのテント区域で被災者に緊急慰問金を届けた。
01・18	慈済基金会は2019年7月に水害が発生した中国福建省南平市順昌県仁寿で被災者のために135世帯の恒久住宅を建設した。本日、入居式が行われると共に、入居祝いとして米と食用油、布団、台所用品、浴用品など30品目が入ったバッグを配付した。
01・19	慈済基金会は中国福建省龍巖市連城県の人民政府と共に「緻密に貧困を助ける」座談会に臨み、農村振興協力同意書を交わした。慈済はこの先3年間、四堡鎮と羅坊郷で試験的に鍵っ子ケア、農村での教師養成、貧困と病苦にある村民ケア、辺境での施療、環境保全活動などのプロジェクトを展開する。

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-3606066
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段248号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大爱テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス London

TEL: 44-20-88699864

フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大爱テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈済

2020年2月19日発行・278号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いです。(日文組編集同人)



プリーズ フォローミー

公共衛生のインフラが乏しく、伝染病が蔓延し易い西アフリカのシエラレオネ共和国では「手洗い」が最高の衛生教育となっている。アレントアウンにあるワーナーホルザー学校では、慈済ボランティアが子供たちにエコ毛布と五穀粉を届け、花蓮慈済病院の鄭順賢医師が正しい手洗いの仕方「7ステップ」を指導していた。大げさな手振り身振りで子供達の関心を集めながら手洗いが重要であることを理解してもらい、バイ菌をお腹に入れないようにと教えていた。

(文、撮影・蕭耀華 シエラレオネ共和国フリータウン 2019.11.15)



慈済日本サイト 慈済ものがたり